

国語学習個体史 ―小学校一学年時におけるMの読むことの学習を中心に―

渡 辺 春 美

はじめに

本稿は、学習者M（女兒）の国語学習個体史の記述と考察を目的とする。国語学習個体史について、野地潤家氏は、「学習者（児童・生徒・学生）の学習活動の展開を、学習者みずからかあるいは指導者（実践主体）が把握し、記述したもの」（注1）とし、「国語教育実践史は国語教育個体史の中心に立つものであるが、国語学習個体史は、その国語教育実践史の内実を各学習者に即して個別的に把握し、記述するところに成立する。」と述べている。その意義については、「国語教育実践史の内実を形成するものであり、実践史批判の基礎資料ともなるものである。」（以上、注2）と記している。

学習者Mの学習活動の実際をとおして、個における、国語の学習活動の実態とその展開とを把握することは、学習者に働いた実践の内実の一端を明らかにすることになる。また、学習の成立過程を具体的な活動に探り、その成立要素、要因を様々な観点から追求することも可能であろう。これは、広い意味での学習者研究につながるものと考ええる。さらに、授業実践が、時代の国語教育の流れになんらかの影響を受けてなされるところなら、学習者もまた、時代を反映させつつ、個性的に学習に参加する。個体史の研究は、学習者の側から、時代の国語教育を考察する契機ともなりうるであろう。

本稿では、後に掲げる資料によつて、便宜上、読むことの学習を中心に整理し、それに考察を加えて、小学校一年時のMの学習の実態をとらえたい。

一 学習者Mの生育略歴

学習者Mの略歴は、次のとおりである。

(一) 略歴

一九八八(昭和六三年) 年七月三日に生まれる。

一九八九(平成 元年) 年四月 一日 私立新家保育園入園。ももぐみ。

一九九〇(平成 二年) 年四月 一日 同。

一九九一(平成 三年) 年四月 一日 同。うめぐみ。

一九九二(平成 四年) 年四月 一日 同。さくらぐみ。

八月 「あじさいしんぶんⅡ」創刊号(以後継続)。

一九九三(平成 五年) 年四月 一日 同。きくぐみ。

一九九四(平成 六年) 年四月 一日 同。ゆりぐみ。

一九九五(平成 七年) 年四月 一日 泉南市立新家小学校入学。一年B組(S先生)。

一二月一二日 日記を書き始める。一日一題。

一九九六(平成 八年) 年四月 一日 泉南市立新家小学校。二年B組(Y先生)。

七月二十六日 日記帳が一冊終わり、日記をやめる。

八月三十一日 「お月さまのうさぎ」を書き、童話コンクールに応募。
以来、いくつかのコンクールに応募する。

一九九七（平成 九年）年一月 一日 通常の日記を書き始める。

四月 一日 泉南市立新家小学校。三年A組（K先生）。

一九九八（平成一〇年）年一月 一日 通常の日記を書き始める。

二月一二日 「めだまやき」を第一六回宝塚ファミリーランド童話。

コンクールに応募（応募八作目）。

五月一七日 デンマーク・チボリ賞を受賞。

一九九八（平成一〇年）年四月 一日 泉南市立新家小学校。四年A組（T先生）。

（二）生育暦

生育暦は、家族新聞『あじさいしんぶん』（一九九四年九月一日 イシダ測機刊）に書かれた記録に詳しい。

Mは、一九八八年七月三日に生まれた。三ヶ月と少しで寝返りを打ち、一〇ヶ月で立ち上がり、一歳の誕生日には四歩歩いている。九ヶ月の時から、徒歩一〇分くらいの距離にある私立新家保育園に通った。

一〇ヶ月で、ものを指さし、「これは」と尋ねるようになった。父が「これは、うさぎ。これは、くま。これは、ねこ。」と、繰り返し動物の名前を教えるのを聞いて覚えたものである。

一歳すぎから絵本が読み与えられた。最初に与えられたのは、交通安全のために配られたパンフレットに載せられたムーミンの話である。折り目が破れそうになるくらいに、繰り返し聞いた。一歳半ころには、「みみちゃん」絵本シリーズ、『ノントン』シリーズ、『バーバーパパ』シリーズを好んで両親に読んでもらっている。他に多くの絵本があたえられ、Mは、読書の好きな子どもとして育っていった。

三歳を過ぎたころから、父が、本の文字を一文一文字指でたどりながら読むのを見て、字を少しずつ覚えていった。三歳半になった二月、風邪による微熱のために保育園を休んだ日に、『となりのトトロ』（一〇七頁）を声を出して独力で読み終えている。

四歳一ヶ月になる一九九二年八月一六日には、ワープロのキーを自分で打ち、「もりのくまさん」と「もりにおちてたまめ」の話を作った。これを機に「あじさいしんぶんⅡ」を発行することになった。その一週間後には、再びワープロに向かい、「うさぎのねぼう」、「まつりわた^{ママ}のしいな」など三編の話を書きまとめた。一九九二年一二月には、手書きで「1ばんになったまらそんたいかい」と題する文章を書いている。両親の方針で文字の書き方は教えられなかったが、見よう見まねで書いたものであった。以後、Mは、手書きの文章を進んで書くようになっていく。Mの文章を中心に載せた「あじさいしんぶんⅡ」は、号を重ね、小学校に入学するまでに、五一号を数えた。

この間、読書量も増えていった。読むのも速くなった。四歳一ヶ月の、一九九三年六月一九日には、黙読を始めている。黙って本を読むMに、母が「本を読んでいるの。」と声をかけると、Mは「うん。」と答えた。「目で読んでいるんだね。」と尋ねると、Mは、「こころのなかでよんでいるの。」と答えている。

漫画も読むようになった。六歳二ヶ月のころには、学習漫画の「世界の伝記」（集英社）の『徳川家康』

『キュリー夫人』『モーツァルト』『クララ・シューマン』『ノーベル』を読み、「日本の伝記」(同)の『織田信長』『武田信玄』『豊臣秀吉』『紫式部』『春日局』などを読んでいる。『中国の不思議な物語』(偕成社文庫 二二三頁)を一日で読み終えたのもこの時期である。小学校に入学してからは、読書の記録をカードにとっている。小学校一年間に読んだ本は、一〇五冊であった。

二 学習者Mの学習個体史関係資料

(一) 学習個体史関係資料

個体史関係の資料に、次のものがある。

1 教科書

一年 『新版 こくご 1上』 (平成七年一月二十日 教育出版)

『新版 こくご 1下』 (平成七年六月二十日 教育出版)

『あたらしいかきかた 一』 (平成七年二月一〇日)

『くりかえしかんじドリル』 (文溪堂)

2 ノート

一年—漢字練習ノート(三冊) こくごノート(二冊半)

3 テスト・プリント

4 文集

一年―「おもいで」(先生の評言がある―渡辺注)

5 「あじさいしんぶん」(家族新聞)

〔保育園(四歳一か月から)一―五一号〕

一年―五二―七一号

6 日記

一九九五年十一月一二日―一九九六年七月二六日

(題名をつけて毎日書いたもの)

7 読書の記録

一・二年―計二一四冊(M自ら記録したもの)

8 学級通信

『たんぽぽ』(一年学年通信)二十号

(二) 教科書の内容

1 『新版 こくご1上』

もくじ

なかよしのはる

たのしい がっこう

四月一七・一八・一九・二〇・二一

四月二四・二五・二六・二七・(二八)

のはらみち

五月

けむりのきしや

五月・六月

なにを して いるのでしよう

六月

せんせい、あのね

六月

おはなしを よもう

七月

けんかした 山

§ものの かたちから できた かんじ

した ことの 中から

七月

えにつきを かく

§かずを あらわす かんじ

しりたいな

九月

どのように して ねるのかな

§かたかな

こえを あわせて

☆大きな かぶ・・・ロシアのおはなし

うちだ りさこ やく

九月

§わたしからみると

よく見て

見た ことを かく

§ひらがなと かたかな

ひらがなの ひょう

あたらしく でた かんじ

いちねんせいで ならう かんじ

ことばのひろば

この きょうかしよで つかって いる きょう

§・・・ことば

2 『新版 こくご 1下』

もくじ

一 おもしろい ところは

☆おじさんの かさ(どうわ) 佐野 洋子

*「おじさん」に はなしたい こと

§みぶりは なにかを つたえます

一〇月

一〇月

二 見つけたよ

一月

しを かく

§はつきり 「おはよう」

三 わかった ことは

一月

☆はたらく じどう車(説明文)

かいたら よみなおす

§文を つくりましょう

四 たのしく よもう

一二月

(一) 子ねこを だいた こと ある? (し)

長谷川 撰子

(二) りすの わすれもの(どうわ) 松谷 みよ子

おもしろかった 本

§小さな くるみ、大きな 木

五 どんな おはなし

一月

☆天に 上った おけやさん(おはなし) 水谷 章三

たずねましょう、こたえましょう

たずねる 文

六 ことばで あそぶ

二月

おもしろい ことば(せつめい文)

*「あ」で あそぶ

かん字あつめ

七 よく おもい出して

二月

わかりやすく かく

§かたかなの ことばあつめ

八 こころの 中へ

三月

☆おてがみ(どうわ) アーノルド ロベール

三木 卓 や く

*かえるくんへ

(三) 学習者Mの一学年時の成績

学習者Mの一学年時の成績は、成績表によれば次のとおりであった。参考までに掲げることにする。

学 習 内 容 (一 学 期)			
さいごまではつきりはなし、せんせいやともだちのはなしをしつかりきく。	○	①	②
ひろいよみではなく、ことばとしてよむ。	○		
かんたんなぶんをつくる。	○		
ひらがなをただしくていねいにかく。	○		
ひらがなをおぼえて(五十おん)かく。	○		

〔注〕①できた ②がんばろう

学 習 内 容 (二 学 期)					
さいごまではつきりはなし、せんせいやともだちのはなしをしつかりきく。					①
「、」や「。」にきをつけて、すらすらよむ。					②
はなしのだいたいのなかみをよみとる。					③
かきたいことをようすがよくわかるようにさく文にかく。					
とめ、はね、じの大きさにきをつけてかく。					
ならったかんじやひらがなをよんだりかいたりする。					

〔注〕 ①よくできた ②できた ③がんばろう

学 習 内 容 (三 学 期)					
さいごまではつきりはなし、せんせいやともだちのはなしをしつかりきく。					①
「、」や「。」にきをつけて、すらすらよむ。					②
はなしのだいたいのなかみをよみとる。					③
かきたいことをようすがよくわかるようにさく文にかく。					
とめ、はね、じの大きさにきをつけてかく。					
ならったかんじやひらがなをよんだりかいたりする。					

〔注〕 ①よくできた ②できた ③がんばろう

三 学習者Mの小学校一年時の読むことの学習

(一) 「大きなかぶ」の学習

「おおきなかぶ」の学習は、一年時の九月になされている。

1 「おおきなかぶ」の感想

読後に、次のような感想を書いている。

おおきなかぶ

かぶがぬけて、よかったね。おおきなかぶだったから、おじいさんひとりだったら、

ぬけなかったとおもいます。みんなでやったからぬくことができたんだね。

評言「そうですね。きっと、みんなのちからをあわせたから、ぬくことができたんだね。」

読後の感想の中では、「おおきなかぶ」の前、七月に学習した「けんかした山」で登場人物への呼びかけ（手紙）の形で書いたものが、最初の感想として、ノートに残っている。学習者Mは、「ふたつの山へ／みどりに、つつまれて、よかったね。もう、けんかしないでね。」と書き、指導者から、「きっと、もう、けんかはしないだろうね。」という評言をいただいている。

自らの感想を直接述べたものとしては、この「おおきなかぶ」の感想が、ノートに残っている最初のものである。読後にMに生じた中心的な感想が、第一文に書かれている。「おおきなかぶ」は、おじいさん一人では抜けず、おじいさんはおばあさんと呼ぶ。それでもかぶは抜けず、おばあさんはまごに助けを求める。それでも抜けず、まごは犬を、犬は猫を、猫は、鼠を呼んで、ようやくかぶは抜ける。次々と助けを求めるところで、話は緊張感を高め、山場に至る。学習者も、また、作品の世界に入り、期待感を高め、かぶが抜けたところでほっと安心する。その感想を、Mは、直接的に、第一文に書いたのであろう。

次に書かれているのは、原因追求的な感想である。かぶがぬけた原因について考え、「みんなでやったから」ととらえるにいたっている。これは、作品のテーマに関わったものとなっている。指導者も、そこに波線を付して取り上げ、対話の形を取りながら、Mの考えを認める評言を添えている。

2 登場人物の気持ちの表現

登場人物の気持ちを、その人物に成ったつもりで、次のように表現している。

- ① 「大きなかぶになるといいな。まいにちみずをあげてそだてよう。」
- ② 「こんな大きなかぶになるなんてまいにちみずをあげたから、大きくなったんだな。」
- ③ 「せっかく大きなかぶになったのに、（、）いっしょうけんめいやって、ぬけないぞ。でも（、）あきらめるもんか。」（二か所、指導者により読点）
- ④ 「おばあさん、かぶをぬくのをてつだってくれんかのう。どうしてもぬけないんだ。」
- ⑤ おじいさん「まごがてつだってくれてもぬけんなあ。はやくかぶをぬきたいなあ。」
- ⑥ 「犬や、犬や、きておくれ。（。）かぶがぬけないんだよ。てつだっておくれ。」（一カ所、指導者により句点）
- ⑦ 「やつとかぶが、ぬけたなあ。さあ（、）かぶをりょうりしてはやくたべよう。きつとかぶはおいしいぞ。」（一カ所、指導者により読点）

学習者Mのこれらの表現は、次のような特徴が見いだされる。

ア、おじいさんやおばあさんに成りきり、その人物らしい言葉遣いで表現している。

イ、場面や筋立てと関連づけて、人物の気持ちを想像して表現している。

ウ、話を、筋道立て、説明する方向で膨らませている。

アは、④⑤⑥の表現に顕著である。イは、③⑥の表現に見いだされる。ウは、①の「まいにちみずをあげてそだてよう。」、②の「まいにちみずをあげたから、大きくなったんだ。」と言う表現に見られる。これは、大きなかぶが取れるに至った理由を説明することで話を膨らませているといえる。また、⑦も、かぶを何のために抜いたのかを説明するという形で話を膨らませている。

幼い表現ではあるが、登場人物の特徴をとらえ、場面に応じて、話の空白部を説明的に埋める形で表現がなされているといえよう。

3 宿題としての本読み

「れんらくちょう」によれば、九月一六・一八・一九・二二・二五・二六・二八・二九・三〇・一〇月三・四・五日の、十二回にわたって、本読みが、宿題に出されている。読みのめあては明らかではないが、次に述べる発表会を考えれば、明瞭な声で、正しく読み、内容をつかみながら、それぞれの人物の気持ちを表現できるようにするところに、読みの目標があつたと推察される。Mの読みも、発表会が設定されているため、機械的にならず、真剣に工夫ができたと考えられる。

4 班による発表会

劇化し、班ごとに役割を分担して練習し、成果をクラスの発表会で発表した。道具類は用いず、ことばと動作によって演じた。学習者Mは、おばあさん役を演じている。

発表会を行うことによって、次のような学習の成果が得られるであろう。

ア、発表会の設定によって、学習の必要感や目的意識が切実なものとなる。

イ、劇化し、動作を伴うことで、間の取り方、声の出し具合、声の強弱、心情の表現を確かにする。

ウ、協力して劇を作り上げる楽しさを味わい、満足感、達成感を持つことができる。

エ、他班の発表によって、聞く態度が養われ、よい点を見つけることで、自らの読みと表現をよりよくすることができる。

5 評価—テスト

次のようなテストが、行われている。

一ねん	こくごテスト	なまえ	M
◎おはなしをよんで、こたえましょう。			
ねずみがねこを			
ひっぱって、ねこが犬を			
ひっぱって、犬がまごを			
1	みんなで、なにをぬこうとしていますか。	(かぶ)	
2	おはなしに、でてきたじゅんに、ばんごうをかきましょう。		
(4)	犬	(3)	まご

ひっぱって、まごが
 おばあさんをひっぱって、
 おばあさんが
 おじいさんを
 ひっぱって、
 おじいさんが
 かぶを
 ひっぱって
 「うんとこしょ
 どっこいしょ。」
 やつとかぶは
 ぬけました。

① - ねこ - 犬 - ② - おばあさん
 - おじいさん

- (1) おじいさん (5) ねこ
 (6) ねずみ (2) おばあさん
 3 つぎのことをしたのは、だれですか
 (1) ねずみをよんできたのはだれですか。
 (ねこ)
 (2) おばあさんをよんできたのはだれですか。
 (おじいさん)
 4 ①と②には、だれがいますか
 ①・・・ (ねずみ)
 ②・・・ (まご)
 5 なんと行って、ひっぱりましたか。
 うんとこしょ、
 どっこいしょ。
 6 みんなでひっぱったら、かぶは、
 どうなりましたか。
 (かぶはぬけました。)

学習の確認のためのテストとなっている。問題本文に基づく問題ばかりではなく、学習の成果の一部を確認するものともなっている。例えば、2・3の問題は、問題本文からでは分からない。学習したことに基づいて答えねばならない問題である。1・4・5・6の問題は、基本的な読解の問題であるが、学習の記憶を確かめる問題ともいえる。

(二) 「おじさんのかさ」の学習

1 「おじさんのかさ」の「てびき」

『こくご』 1上』には、「てびき」がなかったが、『こくご』 1下』から、「てびき」が掲載されている。

1 つぎの ときに、おじさんが した ことをかんがえましょう。

○すこしくらいの 雨の とき。

○もう すこし たくさん 雨がふって きた とき。

○いそぐ とき。

○雨が やまない とき。

○大ぶりの 日

2 おじさんが つぎのように したのは、なぜでしょうか。みんなで、はなしあって みましょう。

○とうとう おじさんは、かさを ひらいて しまいました。

○ときどき、ぬれた かさを 見に いきました。

▼おもしろかった ところを、こえに だして よんで みましょう。

(『新版 こくご』 1下』15頁)

「てびき」の「1」は、雨が降ってもかさをささない、おじさんの不思議な行動をとらえさせるものとなっている。「すこしくらいの 雨の とき」から「大ぶりの 日」へのおじさんの行動をとらえることで、徐々におじさんの行動を不思議に思う気持ちは高まっていく。それは、おじさんの気持ちを考えさせることにもつながっていく。児童は、自らの、雨が降ればかさはさすものという既成の考えと、おじさんの不思議な行

動と気持ちとをつきあわせ、葛藤しながら読みのエネルギーを蓄えていく。

「てびき」の「2」は、そのようなおじさんの変化に着目させ、その理由を考えさせる働きがある。

2 「おじさんのかさ」の感想

読後に、初発の感想を書いている。

おじさんのかさ

~~~~~  
 かさはつかうもの（×）／だから、つかわなかつ／たらいりません（↑）／いくらすてきなかさで  
 ／も、だいじにしていた／ら、かさをかったいみ／がありません。かさを（、）／だいじにおいてお  
 かな／いで、つかったらいい／とおもいます。~~~~~

評言「そうですね。つかうもののなのに、つかわなかつたらいらなにかさなのに、どうしておじさんは、  
 つかわなかつたのでしょうか。そして、そんなにまでつかわないでいていたかさをおじさんはどうし  
 てつかったのでしょうか。」

文中、（、）部は、一マス空けたところを詰めるように×印が指導者によって付されている。また、数マ  
 ス空けたところを詰めるよう、↑印が付けられ、さらに読点が加えられている。

学習者Mは、既成の、雨にぬれないために「かさはつかうもの」という概念に立って、「だいじにしてい  
 たら、かさをかったいみがありません」と述べ、「つかったらいいとおもいます。」と考えを述べている。

そこには、ものの意味（目的）とは別に、大事なものを大切にとっておきたいとする気持ちには、目が向けられていない。また、作品後半の、おじさんが、かさを開き、かさの音を聞くことで、大切なかさの、かさらしいすばらしさに気づいていくところには、理解が及んでいない。

指導者は、まず、そのような、Mの思いを、「そうですね。」と、学習の出発点として受け止めている。その上で、おじさんは、どうして使わないのか、そして、どうして、使うようになったのかを考えるよう、学習の方向付けを、評言によって試みている。

### 3 登場人物への語りかけと、登場人物の気持ちの表現

本文を八場面に分けて学習が進められている。教科書八頁の小さな男の子が、雨宿りに走ってきていうことば、「おじさん、あつちに いくんなら、いっしょに いれてってよ。」に対して、おじさんは、「おっほん。」といって少し、上の方を見て、気づかぬ振りをする。その場面の、「おっほん。」のところに、「こんなだいなかさをつかうもんか」という書き込みが残っている。それによればおじさんの気持ちを想像しながら、読んだことがうかがえる。次に掲げた学習者Mのノートによれば、授業で、登場人物への語りかけと、登場人物に成りきることで、人物の気持ちを表現するという虚構の作文の方法が用いられている。虚構の作文の方法を用いることで、作品世界への同化と異化をスムーズに行い、作品の理解を深めることがねらわれているといえよう。

- ① a 「これはすてきな、かさだなあ。たいせつに（、）つかわないでもっておこう。」

おじさんのかさ

M

① b おじさんあのね。

おじさんは（、）。どうしてそんなにだいじにするの。すぐくすてきなかさだから、かさをつかったらいいとおもうな。

② おじさん、あのね。

雨がふったら、だいじなかがぬれるけど、かさは、つかうものだから、ひとのかさにいれてもらったりしないで、じぶんのかさをさしたらいいとおもうな。

③ かさがよれてないかなあ。きちんとたたんであるかなあ。もしよれていたらたいへんだ。すぐたいせつなかさだからな。ピカピカにしておこう。

④ おじさん、あのね。

どうして男の子がたのんでるのに（、）いれてあげないの。かさをぬらしたくなくても、かさはつかうものだからだいじにしないでつかったらいいな。

⑤ おじさん、あのね。

おじさんは、かさをささないでいたから、雨の音をきかなかったけど、かさをさしたら、とてもいい、きれいな音になるから、もつとはじめからかさをさしてたらよかったのにね。

⑥ おじさん、あのね。かさをさしたんだね。とてもたのしい音が、したから、これからも、もつとかさをつかってね。

そしたらもつと、たのしい音がするよ。

⑦おじさん、あのね。おじさんやつとかさをさしたんだね。いままでかさをだいにしてたけど、いまはもつとたいせつなんだね。

⑧ああ、また かさをさして、きれいな音がききたいなあ。かさをさして、またでかけようかな。どうしようかな。

〔注 ①～⑧は本文の段落に対応している。〕

いくつかの箇所、指導者によって、読点が加えられている。表現①aによれば、学習者Mは、「たいせつに（、）つかわないでもっておう。」とする、おじさんの心を、おじさんになって考えることでとらえている。表現③にもそれがうかがえる。しかし、①b②および④には、初発の感想に見られた、「かさはつかうもの」とする考えが繰り返し見られる。「かさはつかうもの」なのに、使わないおじさんに、繰り返し、かさをうけるよう説いている。しかし、⑤⑥になると、「きれいな音」・「たのしい音」がするから、かさをかうよう勧める。かさを開くことによって生じる、新しい価値に気づいたことによる表現である。それは、表現⑦の「いままでかさをだいにしてたけど、いまはもつとたいせつなんだね。」という新しい価値が加わったことをとらえた表現によって結ばれていることにも見いだされる。

#### 4 「おじさん」にはなしたいこと

この作品に関連して、「『おじさん』にはなしたい こと」という表現学習が組まれている。教科書には、つぎのような、書き出し例が掲げられている。

山田さんは、「おじさん」にはなしたい ことや ききたい ことを かきました。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ね | 。 | お | じ | さ | ん | 、 | と | う | と | う | か | さ | を | さ | し | ち | ゃ | っ | た |
|   |   | か | さ | を | さ | し | て | 、 | 雨 | の | 中 | を | あ | る |   |   |   |   |   |

学習者Mは、「おじさん」と呼びかけ、次のように書いている。

おじさん、はじめはかさをささなかったけど、あとからかさをさしたんだね。おじさんのだいじなのは、いまでもかさなんだね。

わたしのだいじなものは、おにんぎょうの、アリサっていううさぎだよ。ほんとうのうさぎみたいに（、）とってもだいじにしてるんだよ。

指導者評言「きつと、みちちゃんにとってアリサちゃんがだいじなのとおなじぐらい、おじさんにとっては、かさがだいじなのだね。」

指導者によって、読点が加えられている。

学習者Mは、「だいじなもの」と関連させて、ぬいぐるみのうさぎの話をしている。文中、「ほんとうのうさぎみたいに」という、比喻が用いられている。これは、ほんとうのうさぎだったら、愛らしく、皆、大事にかわいがるだろうという、既成の考えがMの心の内にあり、そこから出てきた比喻といえるであろう。

指導者は、評言で学習者Mがアリサを大事にしている気持ちを、おじさんがかさを大事にする気持ちに重ねて理解させようとしていると考えられる。

5 「おじさんのかさ」の音読練習

| め             | あ | て | 10月 |    |
|---------------|---|---|-----|----|
| 大きなこえではっきりよむ  |   |   | ◎   | 24 |
| 、や。であいだをあける   |   |   | ◎   | 25 |
| まちがえないでただしくよむ |   |   | ◎   | 26 |
| いえのひとのしるし     |   |   | ◎   | 27 |
| せんせいのしるし      |   |   | ◎   | 30 |
|               |   |   | ◎   | 31 |
|               |   |   | ◎   | 1  |

「おじさんのかさ」から、よみの「めあて」が明確に示されている。「大きなこえではっきりよむ」と「まちがえないでよむ」は、児童にはっきり理解される「めあて」である。「、や。であいだをあける」については、意味のまとまりをとらえて読む「めあて」となっている。

6 評価―テスト

十一月一八日に、次のようなテストが行われている。

こくごテスト

おはなしをよんで、こたえましょう。

おじさんは、とつても  
りっぱな かさを もって  
いました。くろくて ほそく  
て、ぴかぴか ひかった

11月18日

1 おじさんは、いつも、なにをもつてでかけましたか。  
(かさ)

2 おじさんのかさは、どんなかさでしたか。  
(くろく)て(ほそく)て、  
(ぴかぴか) ひかった

つえのようでした。

おじさんは、でかける  
ときは いつも、かさを  
もって かけました。

すこしくらいの 雨は、

ぬれた まま あるきました。

かさが ぬれるからです。もう

すこし たくさん

雨が ふると、

雨やどりして、

雨が やむまで まちました。

かさが ぬれるからです。

いそぐ ときは、しつかり

だいて、はしって いきました

(つえのような) かさ。

3 つぎのようなとき、おじさんは、どうしましたか。

すこしくらいの雨のとき

ぬれたまま

あるきました。

もうすこしたくさん雨がふってきたとき

雨やどりをして

雨がやむまでまちました。

いそぐとき

しつかりだいて、

はしっていきました。

4 おじさんが かさを ささなかったのは、なぜですか。

かさが、ぬれるからです。

読解のテストともいえるが、学習の確認として用いられているともいえよう。「1」は基本的な読みとりの問題である。本文の「いつも、かさを」でかけました。」を読みとれば答えられる。「2」も、本文をそのまま書き写せばよい。しかし、ここは、かさがどのように立派なものかを問う問題の方が良いかとも思われる。「3」も読みとりの問題ではあるが、「てびき」にもあり、学習時に扱われたことの確認ともいえる。Mは、「もうすこしたくさん雨がふってきたとき」という問に対して、答えに「雨やどりを」して雨がやむまでまちました。」と書いて、マイナス五点となっている。正確に抜き出して書けなかったからであ



ろうか。「4」は、「かさがぬれるからです。」で、正解となっている。しかし、これでは、表面的な答えにすぎない。学習後のテストであれば、「おじさん」の気持ちに触れる答えが欲しいところである。

### (三) 「はたらく じどう車」の学習

#### 1 「はたらく じどう車」の「てびき」

教科書に、次のような、「てびき」が、用意されている。

1 つぎの ことに きを つけて、よみとりましょう。

(1) 「□は、□です。」という ぶん に きを つけて、どんな じどう車が、あるかを よみとる。

(2) それぞれの じどう車が、どのように つくられて いるかを しらべる。

(3) つぎの じどう車で、おもいだす ものを いって みる。

バス——ざせき、……

ポンプ車——ホース、……

2 『はたらく じどう車』に でてくる かたかなの ことばを かきましよう。のばす 音、小さく かく 字に きを つけましよう。

▲ この ほかに、どんな じどう車があるか、ずかんなどで しらべて、さくぶんにかきましよう。

かいた さくぶんを、こえに だして よみましよう。

(『新版 こくご 1下』 二七頁)

「1」は、読みとりに関する「てびき」である。(1)は、文の構造の特徴に着目させながら、必要なことを読みとらせようとするものである。(2)は、それぞれの自動車の特徴的な機能をとらえさせようとするものといえる。(3)は、児童の知識を呼び起こし、既成の知識を賦活させることで、理解を確かにしようとするものであろう。

「2」は、言語事項のカタカナ語の学習のためのものであり、「▲」は、発展としての作文学習のものである。

## 2 「はたらくじどう車」の例を挙げる学習

導入として、働く自動車の例を挙げる学習が行われている。

はたらくじどう車

タクシー

パトカー

きゆうきゆう車

こううんき

ダンプカー

トラック

「はたらくじどう車」に関する興味・関心を高めるためと、「1」の「(3)」につなげる学習といえる。

### 3 文章の構造をとらえた読みの学習

本文を、①いろいろな自動車、②バス、③キャリアカー、④ロードローラー、⑤ポンプ車の五段の意味段落に分けて学習している。②③④⑤段には、

は、です。

という、構造の文章が用いられている。たとえば、②段では、バスについて、

バスは、おおぜいの おきやくを のせて はこぶ じどう車です。

ですから、たくさんのごせきがあります。

と説明されている。この文章の構造に着目して、それぞれの、はたらくじどう車の特色をとらえる学習がなされたと考えられる。「てびき」では、「ゝは、ゝです。」という文章の構造に着目して、読みとることがねらいとされている。しかし、学習の実際では、「ですから、ゝ」も加えた構造に着目して読んだことが、教科書の書き込みからも、後に掲げた学習者Mの作文「ゆうびん車」からも推察される。

教科書の本文の、二・三・四・五段では、「は」・「です」・「ですから」をMが赤丸で囲んでいる。また、「は」・「です」を含む文に傍線を書き込んでいる。第五段落のポンプ車の説明に関してのみ、「ですから」を含む文の、「ですから」を除いた部分に傍線が書き込まれている。

#### 4 「はたらくじどう車」の学習

プリントを利用した学習である。二段のプリントは、次のように工夫されている。

バス

なまえ M

・つかいみち

|   |   |    |
|---|---|----|
| ぶ | お |    |
| じ | き | バス |
| ど | や | ス  |
| う | く | は  |
| 車 | を | 、  |
| で | の | お  |
| す | せ | お  |
| 。 | て | ぜ  |
|   | は | い  |
|   | こ | の  |

・つくりのくふう

|     |   |   |   |   |
|-----|---|---|---|---|
| お   | か | ね | を | い |
| れる  | は | こ | が |   |
| ある。 |   |   |   |   |

|     |   |   |   |   |
|-----|---|---|---|---|
| に   | も | つ | を | お |
| く   | と | こ | ろ | が |
| ある。 |   |   |   |   |

「たぐさんのざせきがある」

「つ리카わやてすりがついている。」

・わかったこと

きま った じこくにきま った  
みちをはしる。

11月22日 水

「つくりのくふう」のところでは、指導者に補足してもらっている。

それぞれの自動車について、「つかいみち」・「つくりのくふう」・「わかったこと」の三つの観点を設け、本文から該当部分を抜き出して記入することで、働く自動車の特徴がとらえられるようになっていく。プリントには自動車の絵も書き込め、学習者の意欲をそそるようになっていく。

以下、同形式の用紙に、キャリアカー（三段）・ロードローラー（四段）・ポンプ車（五段）についてまとめられている。学習者Mは、それぞれについて、次のようにまとめている。

キャリアカー（十一月二四日 金 に学習 注―Mがプリントに日付を書き込んでいる。）

①つかいみち

キャリアカーは、車をはこぶじどう車です。

②つくりのくふう

たいてい二だんになっている。車がおちないようにになっている。

③わかったこと

車を一どになんだいものせてはこべる。

ロードローラー（十一月二七日 月 に学習）

①つかいみち

ロードローラーは、じめんをたいらにかためるじどう車です。

②つくりのくふう

てつでできたおもい大きな車をつけている。まえが見やすくつくっている。

③わかったこと

ゆっくりいたりきたりしてどうろなどをかためる。

ポンプ車（推定十一月二八日 火 に学習）

## ①つかいみち

ポンプ車は、火じをけすときにつかうじどう車です。

## ②つくりのくふう

ホースやはしごをつんでいる。ホースをはこぶ車をのせている。

## ③わかったこと

火じばなどでは、いけやしょう火せんなどから水をすいあげて火をけす。

同じ観点から、それぞれの車の特徴を順次まとめることで、学習者Mは、文章の構造に基づく特徴のとらえ方を学び、とらえることに慣れていったと思われる。

## 4 作文への発展学習―文章構造を利用した作文

「はたらく じどう車」の内容に関連させ、読みの着眼点として用いた文章構造を、作文に生かそうとする発展学習である。学習者Mは、ノートに、次のように書いている。

ゆうびん車

M

ゆうびん車は（ ）てがみや小づつみをはこぶじどう車です。

ですから（ ）赤い目立ついろをして、小づつみなどをのせ（るはこをつんでいます。）ゆうびん

車は、ゆうびんきよく（からゆうびんきよくへ）小づつみをあつめてはいたつします。

指導者から、読点が増えられ、郵便車の作りや働き方について補足がなされている。Mは、読点の使い方に問題を残しているが、「は、です。」・「ですから、」という構造をもった文章を書くことはできている。指導者の補足している箇所は、郵便車に関して、Mの認識できていないところであると考えられる。しかしながら、ここで学んだ作文の構造を、Mが身につけたかどうかは、にわかには判断できない。これより後の表現を丁寧に見るしかないであろう。

## 5 「はたらくじどう車」の音読練習

家庭学習による音読練習が、次のようなめあてで行われている。

| めあて          | 11月 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
|--------------|-----|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 大きなこえではっきりよむ | ◎   | ◎ | ◎ | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  |
| 、や。であいだをあける  | ◎   | ◎ | ◎ | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  |
| まちがえないでたしくよむ | ◎   | ◎ | ◎ | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  |
| いへのひとのしるし    |     |   | ◎ | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  |
| せんせいのしるし     |     |   | 省 | 省  |    | 略  |    |    |    |    |    |

| めあて          | 11月 | 21 | 22 | 23 | 24 | 27 | 28 | 30 | 月 | 1 | 2 |
|--------------|-----|----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|
| 大きなこえではっきりよむ |     | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  |   | ◎ | ◎ |
| 、や。であいだをあける  |     | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  | ◎  |   | ◎ | ◎ |

6 「はたらくじどう車」の評価―テスト  
次のようなテストがなされている。

おはなしをよんで、こたえましょう。

(一) バスは、おおぜいの  
おきやくを のせて はこぶ  
じどう車です。  
ですから、 たくさん

- ざせきが  
あります。  
つり  
てすりも  
ついて  
かわや  
います。

- 3
- （ つりかわ ） （ てすり ）
- バスは、おきやくさんをのせて、どのように  
（ いっ ） （ きまったじこく ） に、はしりますか。



バスは、きまった じこ  
くに、きまった みちを  
はしります。  
(二) ポンプ車は、火じをけ  
す ときに つかう じど  
う車です。  
ですから、ホースや は  
しごを つんで います。  
また、ホースを はこぶ  
車も のせて います。  
火じばでは、いけや  
しょう火せんなどから 水  
を すい上げて、火を け  
します。

〔注〕テストの問いの傍線は渡辺が付した。

学習者Mは、「1」の問いに「おきやく」と答えて、△となって、五点引かれている。

学習の確認テストであろうが、読解テストともなっている。読みの学習で用いられていたプリントでは、「つかいみち」・「つくりのくふう」・「わかったこと」についてまとめるようになっていた。テストでは、バスとポンプ車について、三つの観点からではあるが、問いと答えの欄とが、テストの傍線部のように工夫されている。学習者は、問い方に注意し、問いに対し正しく気を付けて答えることが要求されている。

- (どこ) (きまったみち) を はしります。
- 4 ポンプ車は、どんなときに つかう じどう車ですか。  
(火じをけす) ときに つかう じどう車。
- 5 ポンプ車は、どんなものを つんだり のせたり して  
いますか。  
つんでいるもの  
(ホース) や (はしご)  
のせているもの  
(ホースをはこぶ車)
- 6 ポンプ車は、火じばでは、どのようにして 火をけしますか。  
(いけやしょう火せんなどから 水をすい上げて、火を  
けします。)

#### (四) 「天に 上った おけやさん」の学習

「天に 上った おけやさん」の学習は、連絡帳と「オームカード」(本読みカード)によれば、一二月二〇日から、冬休みを挟んで、一月二二日まで一四時間をかけて行われている。

##### 1 学習のてびき

次に掲げる「てびき」が用意されている。

- 1 つぎの ことを かんがえながら よみましょう。

(1) おけやさんは、どんな ことがあつて、かさやさんの ところへ きたか。

(2) おけやさんは、どんな ことがあつて、天まで 上ったか。

(3) おけやさんは、くもの 上で、どんな ことを したか。

(4) おけやさんは、くもの きれめを ふんで、どう なったか。

(5) この おはなしの おしまいは、どう なったか。

2 つぎの ことばの あらわす ようすを かんがえて みましょう。

・ ふわっと

・ ぐんぐん

・ ぴいんと

◇ この おはなしの おもしろかった ところは、どこですか。はなしあつて みましょう。

(五九頁)

「1」は、話の展開をとらえるための問である。この単元の「はなす・きく」学習のねらいとして、「◇たずねましょう、こたえましょう」(五二頁)がある。このことを考えれば、「てびき」は、このねらいと関連して設けられているとも推察される。「2」は、直接には擬態語の意味をとらえさせる問である。それ

に加えて、ことばからようすを想像させ、擬態語の働きを感得させるねらいを見いだすこともできる。「◇」は、本単元の「はなす・きく」学習のねらいを達成するための問である。この学習は、次に設定されている「◇ たずねましょう、こたえましょう」(六〇頁)という、同じ「きく・はなす」学習にも関連させた学習となっている。

## 2 「天に上ったおけやさん」の感想

学習者Mは、初発の感想を、次のように書いている。

天に上ったおけやさん

おけやさんっていいなあ。だって天の上までいけたんだもん。わたしも天までいきたいな。かみなりさんは、ちよつとこわいけど、おともだちになって雨をふらしてみたいな。きつと雨をふらすのは、(、) おもしろいのだろうな。

「ミ天ミって、いったいどんなところなのだろうね。きつと、すてきなのだろうね。じぶんで雨もふらせてみたいな。」へ注 傍線・(、) 「」は渡辺が付した。ゝ

傍線部「天」および「の」は、字形が悪いのか先生に朱で整えていただいている。(、) 部には、読点が補われている。

感想文は、「おけやさんっていいなあ。」から書き出されている。もっとも心に残っておもしろかった場

面のおけやについての思いを、まず記すことから始めたものといえる。ついで、「だって」とその理由を加える形で感想文が展開している。Mの思いは、かみなりと出会い、頼まれ、夢中になって雨を降らせることのできた、おけやの天上での体験に向けられている。

やがて、かみなりさんは たいこを うちはじめました。

ドドン ゴロゴロ、ドンゴロ ドンゴロ

「ほうれ、おまえも 雨を ふらせろ。」

そこで、おけやさんも、水ぶくろの 水を ザンブカ ふりまきながら、くもの 上を かけまわりました。むこうでは、かみなりさんが、たいこを うちながら どなっています。

ドドーン ゴロゴロ

「おうい、足もとに きを つけろ。くもの きれめが あるでなあ。」

おけやさんは、おもしろくて たまりません。むちゆうに なって、あっち いき、こっち いき しているうちに、うっかり、くもの きれめを ふんで しまいました。(五五頁)

おけやが、「おもしろくて」「むちゆうになって」、「水ぶくろの 水を ザンブカ ふりまきながら、くもの上を かけまわ」っている姿が生き生きと描かれている。Mは、この場面を思い描き、そこに気持ちに沿わせて感想を書いたといえる。評言は、場面に沿わせて書いたMの感想をそのまま受けとめ、対話のようになされている。

### 3 教科書本文中の傍線の箇所

(一) 段 ふろおけの たがを しめていました。(五〇・五一頁)

(二) 段 とびだして きて いいました。(五一頁)

いい きもちで、うつら うつらと して いました。(五一頁)

(五) 段 水ぶくとを かつがされて、くもの上を よつちら おつちら、かみなりさんについて いきました。(五四頁)

水ぶくろの 水を ザンザカ ふりまきながら、くもの 上を かけまわりました。(五五頁)  
むちゆうに なって、あっち いき、こっち いき して いるうちに、うつかり、くもの きれめをふんで しまいました。(五五頁)

(七) 段 おしょうさんが、大きな ふろしきの まわりを ひっぱって、木の 下で ぴいんと ひろげました。(五七頁)

おけやさんは、目を つぶって、すうつと いきを すいこんでから、「えいやっ」とばかりにとびおりました。(五八頁)

### 4 登場人物の心を想像する読みの学習

次に掲げた教科書の①から③の箇所で、(一)部のように、付け加える内容を想像し、直接教科書に書き込んでいる。①では、指導者から教科書に朱で○をもらっている。

①「へえ。かさやで かさの ばんを しとつたら、かさが かぜに とばされてなあ……。」「(五三頁)

(あわててかさをつかんだら、かさといっしょにふきあげられてなあ。)

②「おうい、たすけて くれえっ。」(五六頁)

(おっおねがいだたすけてくれえつきこえないのかあっ)

③「ははん、さっきの かみなりが、あんな ところに おちたか。それにしても、おかしな かみなりじゃ。人げんの ことばで どなつて おるが。」(五六頁)

(なんだかまたたすけてくれというているがどうしたんじゃろ)

Mの表現は、教科書に直接書き込んだためか、一部を除いて句読点が抜けている。しかし、ア・表現は、「ふきあげられてなあ」、「どうしたんじゃろ」のように、登場人物らしさを表現したものとなっている。イ・「きこえないのかあっ」、「またたすけてくれというているがどうしたんじゃろ」と、状況をとらえた表現がなされている。また、Mの表現は、ウ・教科書本文に学んだ表現となつてもいる。Mは、教科書本文の、「おけやさんは、とんで いく かさを、あわてて 二、三本つかまえましたが、その とたん、かさといっしょに 空へふき上げられました。」という表現を用いて、「あわててかさをつかんだら、かさといっしょにふきあげられてなあ。」と表している。「おちるうっ」、「たすけて くれえっ」という「っ」の特殊な用い方も「おっおねがいだたすけてくれえつきこえないのかあっ」と、表現に利用し、会話に緊迫感を出している。以上に、Mの表現の特徴を見いだすことができよう。

## 5 「天に 上った おけやさん」の課題学習

四枚の学習プリントを用いて、課題学習がなされている。プリント「天に 上った おけやさん①」では、

おけやが、「どんなところ」で「だれとあった」かを答えることで、話のすじをおさえさせる学習がなされている。プリント②③④では、それぞれの場面におけるおけやの気持ちを膨らませて想像させる学習が意図されている。

天に 上った おけやさん ①

一ねんBくみ なまえ ( M

おけやさんは、どんなところへ とばされたり おちたりしましたか。  
また、そこで どんな人と あいましたか。  
じゅんじょよく こたえなさい。

(1) ○どんな ところ？

かさやさんのみせのまえ

●だれと あった？

かさやさん

(2) ○どんな ところ？

天

●だれと あった？

かみなりさん

(3) ○どんな ところ？

おてらの大きな大きなまつの木のでっぺん

●だれと あった？

おしょうさん

きんじょの人たち

〔注 番号は便宜上渡辺が付した。〕

(1)の「かさやさんのみせのまえ」、(3)の「おてらの大きな大きなまつの木のとっぺん」、及び「きんじょ」は、記述が不十分であったとみえて、△とされ、Mが、赤鉛筆で訂正したものである。以下、「天に 上った おけやさん」②③④の課題が課されている。プリントには、教科書の当該場面の絵が入れられ、吹き出しの中に、おけやが心の中でどんな話をしてたかを書き入れるようになっていいる。Mは、次に掲げるように書きまとめている。

天に 上った おけやさん②

かさの、みはりばんを している おけやさんは、こころの 中で、どんな おはなしを、していたでしょう。

「ああ(、) いいきもちだなあ。おけやさんのしごとは、たいへんだったけど、このしごとはらくだなあ。おけやさんをやめて、かさやさんになろうかな。

天に 上った おけやさん③

水ぶくろの 水を ザンザカ ふりまいて、くもの上を かけまわっているとき、おけやさんはどんな おはなしを していたでしょう。

「ああ(、) おもしろい(、) おもしろい。雨をふらすのはとてもたのしいなあ。ここで ずっとかみなりさんの、手つだいをしていよう。」



天に 上った おけやさん④

「・・・おもいきって とびおりるのじゃあつ」といわれた おけやさんは、こころの中で、どんなおはなしをしたでしょう。

「あつあそこへとびおりるのか。こ、こわいなあ。しぬかもしれない。いやいやそんなことはかんがえないぞ。よし、おもいきってとびおりよう。」

「天に 上った おけやさん」②の表現は、指導者によって、読点が加えられている。ここでは、教科書本文「いままでの しごとに くらべたら、なんとも らくな ものです。おけやさんは、いい きもちで、うつら うつらと して いました。」（五一頁 注 傍線は渡辺が付した。）をふまえ、心地よさと、おけやとかさやの仕事を比較した気持ちの表現がなされている。③の表現も、読点が二カ所加えられている。かみなりを手伝い雨を降らせることの楽しさと、楽しい手伝いを続けたいとするおけやの気持ちが表現されている。④には、「おけやさんは、目を つぶって、すうっと いきを すいこんでから、『えいやつ』とばかりに とびおりました。」（五八頁）という一文から、勇気を持って死の恐怖を退け、飛び降りることを決意するおけやの気持ちを読み取り、表現している。学習者Mは、本文から状況をとらえ、自らの経験と知識とを動員して、おけやの心に死への恐怖と、さらにそれを退けた勇気とを見いだしたといえる。

## 6 「天に 上った おけやさん」の音読練習

練習が、次のようになされている。

| め             | あ | て | 12月 |    |
|---------------|---|---|-----|----|
| 大きなこえではっきりよむ  |   |   |     | 20 |
| 、や。であいだをあける   |   |   |     |    |
| まちがえないでただしくよむ |   |   |     |    |
| いえのひとのしるし     |   |   |     |    |
| せんせいのしるし      |   |   |     |    |
| 省             | 省 | 略 | 略   | 21 |
| 略             | 略 | 略 | 略   | 22 |
| 1月            |   |   |     |    |
|               |   |   |     | 8  |
|               |   |   |     | 9  |
| 省             | 省 | 略 | 略   | 10 |
|               |   |   |     | 11 |
| 略             | 略 | 略 | 略   | 12 |
|               |   |   |     | 16 |
|               |   |   |     | 17 |

| め             | あ | て | 1月 |    |
|---------------|---|---|----|----|
| 大きなこえではっきりよむ  |   |   |    | 18 |
| 、や。であいだをあける   |   |   |    |    |
| まちがえないでただしくよむ |   |   |    |    |
| いえのひとのしるし     |   |   |    |    |
| せんせいのしるし      |   |   |    |    |
| 省             | 省 | 略 | 略  | 19 |
| 略             | 略 | 略 | 略  | 20 |
|               |   |   |    | 22 |

「天に 上った おけやさん」の学習は、連絡帳によれば、一二月二〇日に始まり、その日に本読みの宿題が出されている。しかし、Mのカードの記載では、二〇日の欄が空白になっている。これに関してMは、次のように日記に書いている。

本読み

一二月二〇日

きょう、がつこうのしゅくだいで本よみがでたので、おとうさんにきいてもらいました。だいめい

は、「天にのぼったおけやさん」です。はじめてよんだときはまちがってしまいました。でもおとうさんがねていてきいていなかったの、れんしゅうすることになりました。二かいめはまちがわないでじょうずによめました。でもまだおとうさんがねているのでさきにあしたのじかんわりをすることにしました。またあとでおとうさんがおきたらきいてもらいたいです。

一二月二〇日に、初めて読み、最初は間違ったが、練習してうまく読めるようになったことが記されている。Mは、明日の時間割に合わせて教科書類の準備をし、父に読みを聴いてもらえぬままになったことが想像される。一月一九・二〇日に読み間違えているのは、マンネリ化して気持ちにゆるみが出たことによるとも考えられる。

## 7 発展学習(1)

「天に 上った おけやさん」の発展として、「たずねましょう こたえましょう」が設定されている。教科書の本文から、次に引くことにする。

先生が まさおさんに たずねました。

「まさおさん。おけやさんは、空 たかく はじきとばされて、どこに おちましたか。」

まさおさんは、先生の ことばを 耳を すまして きき、はつきりと こたえました。

「おけやさんは、かさやさんの みせの まえに おちました。」

つぎに、まさおさんが ゆきこさんに たずねました。

「おけやさんは、かさやさんで、どんな しごとを しましたか。」

「おけやさんは、ならべて ほした かさの 見はりばんの しごとを しました。」

☆ わたしたちも、『天に 上った おけやさん』の はなしに ついて、たずねたり こたえたり して みましょう。(六〇・六一頁)

注 網かけ部は、教科書本文に薄く色づけがなされている箇所である。

傍線部は、Mが語を丸で囲んでいる箇所である。

ここでは、尋ね方、答え方の学習がなされている。「天に 上った おけやさん」をもとに、様々な尋ね方、答え方の学習がなされたことが推察される。Mのノートには、次の練習文が記されている。

「おけやさんは天までとばされて、だれに会いましたか。」

「おけやさんは、かみなりさんに会いました。」

おばあさんはメガネをかけていますか。

おじいさんは、なにいろの犬をつれていますか。

木には、なに色の花がさいていますか。

8 「天に 上った おけやさん」の評価―テスト

次のようなテストがなされている。

こくごテスト

おはなしをよんで、こたえましょう。

かみなりさんは、さつそく、  
おけやさんに しごとを いい  
つけました。

「さあて、いまから ゆうだち  
を ふらすでな。 この 水  
ぶくろを もって、 ついて  
こい。」

おけやさんは、 おもい 水  
ぶくろを かつがされて、くもの  
うえを よつちら おつちら、  
かみなりさんに ついて いき  
ました。 やがて、 かみなりさ  
んは たいこを  
うちはじめました。

ドドン ゴロゴロ、  
ドンゴロ ドンゴロ

「ほうれ、おまえも  
雨を ふらせろ。」

一ねん ( M )

一 おけやさんは、どこにいますか。

( 天 )

二 かみなりさんは、なぜ、「水ぶくろをもつてついてこい」  
と、いったのですか。

・ なに ( ゆうだち ) を

・ どうする ( ふらす ) から

三 水ぶくろが、おもそうなようすが わかることばを か  
きなさい。

( よつちら おつちら )

四 「おまえ」とはだれですか。

( おけやさん )

五 おけやさんは、「雨をふらせろ。」と いわれて、どう  
しましたか。

・ ( 水 ) を ザンザカ

( ふりまき ) ながら、

( くも ) の上を、

( かけまわり ) ました。

そこで、  
おけやさんも、  
水ぶくろの 水を ザンザカ  
ふりまきながら、くもの うえ  
を かけまわりました。

六

「ザンザカ」ということばから、どんなようすが わか  
りますか。一つ○をつけなさい。

- (一) 水を あちこちに まいた ようす  
(○) 水を たくさん まいた ようす  
(一) 水を かぶった ようす

Mは、「六」で「水を あちこちに まいた ようす」に○をつけて、まちがいとなっている。「二」は、場面の理解を問うものである。本文から答えれば、「くものうえ」と答えてもよいところであろうが、「天」と答えている。これまでの学習に基づく場面の理解によって答えたものである。「二」・「四」・「五」は読解力を問うものである。とともに、問に対して的確に答えることも要求されている。このうち、「二」は理由を問うもの、「四」は行動を問うものであるが、それぞれに答えやすいように配慮がなされている。「三」と「六」とは、言語感覚を問うものといえよう。

8 発展学習(2)

「天に 上った おけやさん」は、二月九日(金)に行われたミニ発表会で、発表グループの一つの「くご」グループによって劇化されて演じられている。このミニ発表会は、保護者の参観日に合わせて計画、実行されている。プログラムは、一、せいかつ 二、音がく 三、さんすう 四、たいいく 五、くご 六、グループで 七、「あの青い空のように」 おや子ゲームかい、となっていた。学習者Mは、「五、くご」グループに属し、「ナレーター②」として劇に参加している。その時のことを、Mは、次のように作

文に書いている。

M

きょう学校でミニはっぴようかいがありました。わたしはミニはっぴようかいのこくごグループだったので「天に上ったおけやさん」のげきをしました。はじめにせいかつのはっぴようを見ました。それから音がくやさんすうのはっぴようを見ました。つぎはこくごグループです。わたしはドキドキしながらきをやりました。つぎは音がくのがっそうです。わたしはいっしょうけんめいやりました。そのあと(た)をうたってゲームをしました。とてもたのしかったです。

「評言」こくごチームさんは、よくれんしゅうをしていたものね。ほんばんもすばらしかったですよ。よくがんばったね。

Mは、二月一日の日記で、ミニ発表会の練習について、「ミニはっぴようかい」と題して、次のように書いている。

きょうミニはっぴようかいのれんしゅうをしました。わたしたちは、こくごやさんすうのグループにわかれてAぐみといっしょにミニはっぴようかいをするのです。おんがくのグループだったらうたをつくったりします。わたしはこくごのグループです。わたしたちはげきをすることにしました。

「天に上ったおけやさん」のげきです。わたしはナレーター②です。みんなせりふはおぼえているけ

どうごきがへんだったりしてうまくいけませんでもれんしゅうしたらうまくなれると思います。

保護者の参観の下に行われたミニ発表会は、クラスの枠を取り払って行われている。Mにとっても、子供たちにとっても、はりのある楽しいものであったと思われる。それだけに、練習も目的意識をもったものとなったと考えられる。日記には、練習で、「セリフ」は覚えたものの「うごき」との間にずれのあったことが書かれている。これは本番までに改善されていたのであろう。劇化し、繰り返し練習し、演じることによって、ナレーターも含めて、子供たちは、ことばを心身に密着したものとして獲得していったものと推察される。

#### (五) 「おてがみ」の学習

「おてがみ」の学習は、後に掲げた、音読練習の家庭学習からすれば、二月一六日から、一七時間をかけてなされている。

##### 1 「おてがみ」の「てびき」

次のような手引きが、用意されている。

- |            |     |           |         |         |
|------------|-----|-----------|---------|---------|
| 1 つぎの      | ときの | 気もちを      | かんがえながら | よみましょう。 |
| (1) かえるくんの | 気もち |           |         |         |
| ・「ぼく、もう    | いえへ | かえらなくっちゃ、 | がまくん。」  |         |
| と          | いった | とき。       |         |         |



・がまくんの いえの まどから、なんかいも そとを のぞいたとき。  
(2) がまくんの 気もち

・「だれも、ぼくに おてがみなんか くれた ことが ないんだ。」  
と いった とき。

・「ああ、」「とても いい てがみだ。」  
と いった とき。

▲ かたつむりくんは てがみを わたす とき、なんと いったでしょう。さ  
くぶんにかきましよう。

手引きは、話の筋をとらえさせる「天に 上った おけやさん」の手引きとは違い、登場人物の気持ちを考  
えさせるものとなっている。「▲」の書くための手引きも入れれば、登場人物全員の気持ちをとらえさせる  
手引きといえる。

## 2 「おてがみ」の感想

Mは、初発の感想を、次のように書いている。

おてがみ

どうしてがまくんは、おてがみ(を)もらえなかったのかな。わたしはおてがみいっぱいもらえる  
のに。がまくんが、おてがみもらったことないならわたしが、がまくんに手がみかいてあげるのにな。  
でも、わたしがおてがみだすときはゆうびんやさんにたのむよ。

指導者から、助詞「を」が、補われている。また、ひらかなの「か」の縦線に朱が入れられている。教わることなく自分でひらかなが書けるようになったため、このころになっても、書き順が間違っているものもいくつかあった。点やはねも正しく書けないものがああった。「か」も縦線が、「ノ」のようにになっているのを直されたものであろう。

指導者からは、傍線（実際は波線―渡辺注）を入れていただき、そこに四重丸がつけられている。

Mは、作品世界に半ば溶け入って感想を書いている感じがする。自己と比較しながら、手紙の来ない「がまくん」に同情し、「手がみをかいてあげるのにな。」と、書いている。ここには、作品世界と、現実世界の境界線がなくなっている。しかし、「わたしがおてがみだすときはゆうびんやさんにたのむよ。」では、現実世界に引き返しているともいえる。また、この箇所は、「かえるくん」が、足ののろい「かたつむりくん」に手紙を託したことへの批判的な気持ちが動いているとも見える。初発の感想を書いた時点では、Mは、「かえるくん」の優しさについて書くまでには、心が動いていないといえる。

### 3 課題プリントによる読みの学習

#### （1）おてがみ①

課題プリント「おてがみ①」では、教科書の挿し絵に吹き出しを付ける形で、「がま」と「かえる」の本文中のことばを書き写させている。

「がま」―「いま、一日のうちのかなしいときなんだ。つまり、おてがみをまつじかんなんだ。そうなる  
と、いつもぼく、とてもふしあわせな気もちになるんだよ。」

「かえる」——「どうしたんだい。がまがえるくん。きみかなしそうだね。」

(2) おてがみ②

課題プリント「おてがみ②」については、次のとおりであった。教科書の挿し絵に吹き出しを付ける形は、「おてがみ①」と同じだが、このプリントでは、「ふたりとも、かなしい 氣ぶんで、げんかんの まえに こしを おろして いました。」(八四頁)という場面をとらえて、文中のことばを書き写させるのではなくて「がま」と「かえる」の氣持を想像させて吹き出しに入れさせたものと思われる。Mは次のように書き入れている。

「がま」——「やっぱり、だれもぼくなんかおてがみくれないんだ。でもおてがみ一まいくらいはほしいなあ。」

「かえる」——「がまくんがおてがみもらったことないなんてぼくしらなかったよ。でもがまくんは、どうしておてがみもらえないのかな。はやくがまくんにおてがみがくるといいな。」

(3) おてがみ③

「おてがみ②」と同様の方法である。「かえるくんは、大いそぎで、いえへかえりました。えんぴつとかみを見つめました。かみに なにか かきました。かみを ふうとうに 入れました。」(八五頁)という場面から、「かえる」の氣持を想像させたものと推察される。

「かえる」——「はやく手がみをかいてがまくんをよろこばせよう。おてがみがといたらがまくんなんて ゆ(ママ)うかな。たのしみだな。」

## (4) おてがみ④

「おてがみ①」と同様の方法で、「かえる」と「かたつむり」のことは教科書本文から抜き出させている。

「かえる」——「おねがいでけどこの手がみを、がまくんのいえへもって行って、ゆうびんうけにいらてきてくれないか。」

「かたつむり」——「まかせてくれよ。」「すぐやるぜ。」

## (5) おてがみ⑤

気持を想像させ、吹き出しにいれさせる方法である。「かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやってきません。」という場面に基づき想像させたものと考えられる。

「かえる」——「早くおてがみこないかな。早くがまくんをよろこばせたいのに。でもかたつむりくん、ちゃんとどけてくれるかな。」

## (6) おてがみ⑥

ここでも、「それから ふたりは、げんかんに出て、てがみの くるのを まっていました。ふたりとも、とても しあわせな 気もちで、そこに すわって いました。」(九一・九二頁)という場面に基づき、気持を想像させている。Mの書いたものは、次の通りである。

「がま」——「ありがとうかえるくん。とてもいいてがみだね。早くてがみがくるといいな。でも、ちゃんとどくのかな。」

「かえる」——「ぼくね、がまくんがおてがみもらったことがないってきいたからおてがみかいたんだよ。」

早くおてがみがくるといいね。」

(7) おてがみ⑦

四日後、「かたつむり」が、「がま」の家に着き、手紙をわたす。「てがみを もらって、がまくんは とても よろこびました。」(九二頁) という、最後の場面についてだと考えられるが、「がま」、「かえる」、「かたつむり」のそれぞれの気持ちを、挿し絵の吹き出しに書き入れさせている。

「がま」―「かえるくん かたつむりくん ありがとう。ぼくすごくうれしいよ。ぼくもおてがみをかくからね。」

「かえる」―「がまくん ぼくこれからおてがみかいてあげるからね。それから(、) かたつむりくんにも、おてがみかいてあげるよ。」

「かたつむり」―「おくれてごめんね。でもぼくいっしょうけんめい、いそいできたんだよ。」

「おてがみ」①と④とは、それぞれの人物(「かえるくん」と「がまくん」)の気持ちの表れた箇所を、本文の表現中に見だし、吹き出しに書き込ませることによって気持ちを理解させる学習である。吹き出しに記入させることで、場面の読みの重要語である、「悲しい」・「ふしあわせな」ということばを学習していったものと思われる。

後は、登場人物の気持ちをとらえることが学習の中心となっている。学習するために、人物に成りきって気持ちを書くという、虚構の作文の方法を用いている。教科書中の挿し絵を用い、吹き出しによって気持ちを書かせるという方法は、容易に学習者をその人物に成りきらせる働きがあると思われる。人物に成りきる

ことで、作品世界に生きさせ、切実に気持ちを読みとらせようとするものといえる。

書き込みを読むと、Mの読みが伝わってくる。「おてがみ」②の「がまくん」は、本文ではあきらめてい  
ると思われるものの、吹き出しのMの文では、「がまくん」に、「おてがみ一まいくらいはほしいなあ。」  
と言わせている。「がまくん」の心の片隅にあることばを想像したともいえる。同じく、「かえるくん」に  
は、「でもがまくんは、どうしておてがみもらえないのかな。」と言わせている。M自らの疑問に重なるも  
のであろう。しかし、このこたえは、本文からは見つからない。どこまでも、疑問のまま残るのであろうか。  
「おてがみ」③では、「おてがみがとどいたらがまくんなんてゆうかな。たのしみだな。」と書いている。  
手紙がとどいたときの「がまくん」の様子を思う「かえるくん」の気持ちが、Mの想像の中に広がっている  
ことが理解される。また、「おてがみ」⑤と⑥には、「かたつむりくん」への不安が、あたまをもたげてい  
る。これは、Mの、「ゆううびんやさんにたのむよ」という初発の感想と結びついているものかもしれない。  
それに、応ずるように、「おてがみ」⑦では、「かたつむりくん」に、「でも、ぼくいっしょうけんめい、  
いそいそきたんだよ。」と言わせている。

この学習に関して、Mは、日記の中で、次のように書いている。

こくご

3月12日

きょう、こくごのじかに「おてがみ」をべんきょうしました。きょうはかえるくんがおてがみを  
かいているときの気持ちプリントにかいたりしました。おてがみというおはなしは手がみをもらえ  
ないがまがえるくんにかえるくんがてがみをかいてあげるといっておはなしです。だからプリントにが

まくんとかえるくんのことばやおもっていることをかくんです。プリント（ママ）にことばをかくときかんがえてゆつくりかく人とスラスラかく人がいます。わたしはスラスラかきます。このごろいつもプリントばかりなのでかんたんです。

「おてがみ」の話の中核部が、簡潔にまとめられている。説明の仕方に、ゝは、ゝです。ですから、ゝ、という「はたらく じどう車」で出た文章の構造に近い構造がみられるのが目を引く。学習の方法に慣れてきたのか、スラスラ書けると記している。しかし、これまで見たとおり、子細に吹き出しの文章を読めば、学習者Mの、読みⅡ想像の広がり、起伏を伴っているのが認められる。想像しながらも、既成の考えとぶつかったり、疑問を感じたりしながら読み、また、一方では、世界を統一しようとする力を幼いながら働かせて読み進めていることも理解される。

#### 4 「かえる」への手紙

発展として、手紙文が課されている。教科書には、次のように説明している。

がまくんになった つもりで、かえるくんに へんじの てがみを かきましよう。

○はじめに、かえるくんの てがみと おなじように、「しんあいなる かえるくん。」と かく。

○つぎに、おれいの ことばと、てがみを もらったときの 気もちを はなすように かく。

○おしまい、ことばを かんがえて かく。

☆ ほかの おはなしの 本を よんで、出て くる 人に てがみを かいて みましょう。(九  
四頁)

学習者Mは、次のように手紙を書いている。

「かえるくんへ」

( M )

しんあいなるかえるくん。おてがみをくれてありがとう。ほんとでもうれしかったよ。おてがみだれもくれなかったけど、かえるくんはおてがみくれたんだね。でも一まいだけじゃなくていっぱいほしいな。これからほんとだれかがおてがみくれるっておもうことにするよ。だからまたおてがみかいてね。

がまがえるより

「しんあいなるかえるくん」と初めに書かせている。これは、作中人物に同化させるための工夫である。話すように書かせるのも人物の心を場面の中で表しやすくするための工夫である。しかし、話すように書かせることで、先に、指導者が助詞の「を」を補った指導が生かseなくなっている。指導を一貫しようとすれば、「ぼく(は)とてもうれしかったよ。」「おてがみ(を)だれもくれなかったけど、」等と訂正を要する作文になっていよう。工夫の望まれる発展である。



## 5 「おてがみ」の音読練習

家庭での音読練習が、次に掲げるようになされている。

| め             | あ | て | 2月 |    |
|---------------|---|---|----|----|
| 大きなこえではっきりよむ  |   |   | ◎  | 16 |
| 、や。であいだをあける   |   |   | ◎  | 17 |
| まちがえないでただしくよむ |   |   | ◎  | 19 |
| いへのひとのしるし     |   |   | ◎  | 20 |
| せんせいのしるし      |   |   | ◎  | 21 |
|               |   |   | ◎  | 22 |
|               |   |   | ◎  | 26 |
|               |   |   | ◎  | 27 |
|               |   |   | ◎  | 28 |
|               |   |   | ◎  | 29 |

| め             | あ | て | 3月 |   |
|---------------|---|---|----|---|
| 大きなこえではっきりよむ  |   |   | ◎  | 1 |
| 、や。であいだをあける   |   |   | ◎  | 2 |
| まちがえないでただしくよむ |   |   | ◎  | 4 |
| いへのひとのしるし     |   |   | ◎  | 5 |
| せんせいのしるし      |   |   | ◎  | 6 |
|               |   |   | ◎  | 7 |
|               |   |   | ◎  | 8 |

三月一日(月)には、「『おてがみ』をよんで、きいてもらったおうちの人に ひとことかんそうをれんらくちょうにかいてもらう。」という宿題がでている。父親のHは、次のように、Mに向けて書いている。

かえるくんはやさしいね。がまくんが手紙をもらえなくてかなしんでいるのを見て、かえるくんもかなしいきもちになるね。「ふたりとも、かなしい 気ぶんで・・・」というところに、がまくんのかなしい気もちをじぶんのここのように考えているかえるくんのやさしい気もちがつたわってきます。

家にすぐかえって手紙をがまくんに書いてあげるところにもやさしさがあらわれていますね。しかし、かえるくんは、少しおっちょこちよいですね。足ののろいかたつむりくんの手紙をたのむなんてね。でも、足ののろいかたつむりくんにたのんだおかげで、かえるくんとがまくんの二人で、手紙のくるまでの長い時間をともしあわせな気持ちでまてたんだね。いい話だね。二人のこえをつかい分け、気持ちがあらわれるようじょうずに読んでくれたね。ありがとう。

家庭での音読練習に倦むことのないように、そして、学習者の意欲と積極性をひきだすように考えて出された課題であろうか。このような、課題をとおしてMと父親のHとは、「おてがみ」について、対話ができている。

## 6 評価—テスト

次のようなテストが行われている。

こくごテスト

一ねん

◎おはなしをよんで、こたえましょう。

がまくんが いいました。

「だれも、ぼくに おてがみ

なんか くれた ことが

ないんだ。てがみを まって

いる ときが

( M )

1 だれと だれが はなしをしていますか。

(がまくん)と(かえるくん)

2 がまくんが、てがみを まっているとき かなしいのは、なぜですか。

(一ども手がみをもらったことがないから)

かなしいのは、その  
ためなのさ。」  
ふたりとも、  
かなしい きぶん  
で、 げんかんの  
まえに こしを  
おろして いました。  
すると、かえるくんが  
いいました。  
「ぼく、もう いえへ かえら  
なくっちゃ。しなくちゃ  
いけない ことが あるんだ。」  
かえるくんは、大いそぎで、  
いえへ かえりました。かみに  
なにか かきました。  
ふうとうに、こうかきました。  
「がまがえるくんへ」  
かえるくんは、いえから  
とびだしました。

3 ふたりとも どんなきぶん で いましたか。

(かなしいきぶん )

4 しなくちゃいけないこと とは、 なんですか。

だれ なに

(がまくん )に (おてがみ )を

どうする

(かく )こと。

5 かえるくんは、どんなようすで いえへ かえりましたか。

(大いそぎ )

6 いえからとびだしたときの、かえるくんの気もちに ○をつ  
けましょう。

( )がまくんは、よわ虫だなあ。

(○)はやく がまくんを よろこばせよう。

( )てがみを かくのは 大へんだ。

もうすぐ、てがみがとどくのは、だれですか。

(がまくん )

テストは、人物の様子を押さえる問い、人物の気持ちとその気持ちが生じた理由、人物の行動の目的などを、本文に即したり、まとめたり、あるいは、想像したりして答える問題となっている。本文から読みとり、考えるだけでなく、学習した内容を整理して書く力も必要とするであろう。学習者Mは、「2」の問題を、

「だれもてがみをくれたことがないから」と書いて、×となり、赤鉛筆で、「いちども手がみをもらったことがないから」と訂正している。この訂正をMが、どのように理解し、納得したのかは疑問である。点数は、九五点である。

## おわりに―学習者Mの読むことの学習考察のまとめ

### (1) 音読の実態

教科書の文章に関しては、次のようである。

ア、意味のまとまりで、文章を読むことができる。

イ、明瞭な発音で、正しくことばをとらえてよむ。

ウ、登場人物の気持ちを考えて読みに表現する。

エ、登場人物を読み分ける。

オ、繰り返し読むことで、文章の一部をそらんじ、ことばやリズムをみにつけていきつつある。

### (2) 文学作品を読む学習におけるMの実態

ア、幼くはあるが、登場人物の特徴をとらえ、場面に応じて、話を、筋道立て、説明する方向で膨らませる。

イ、既成の考えや価値観と作品世界をつき合わせながら、共感したり、疑問を感じたりしながら読んでいく。

ウ、幼いながら、作品世界を統一する力を働かせながら読み進める。

ウ、登場人物に成りきり、その人物らしい言葉遣いで表現する。

エ、場面や筋立てと関連づけて、人物の気持ちを想像して表現する。

(3) 説明文の読みの実態

ア、文の構造に基づく読みが学習されている。それに基づいて読み取ることができる。

イ、文の構造や読みの観点を、現実認識に生かすことは難しい状態である。

(4) 生活の中での読書

本を選び、読むことを日常的にする。読んだ本を記録する。

注1 野地潤家氏著『国語教育―個体史研究―』（一九五六年三月 光風出版 五四頁）

注2 注1に同じ（六〇頁）

「参考」生活における読む学習

1 日記から

本

3月19日

わたしはカードによんだ本をかいているんです。もうカードは4まいくらいあります。いままでいろんな本をよんできました。お父さんにかつてもらった本やとしょかんからかりてきた本ちゃんとひにちもかいて

あります。おねえちゃんもよんだ本をカードにかいていたのですが、つづけられませんでした。それからわたしはよんだ本をカードにかいたらお父さんによんだ本をワープロにかきうつしてくれるのです。それは、あじさいしんぶんにいつかのせようと思います。だからこれからも本をいっぱいよんでいきます。

としよかん

12月9日

きょう、としよかんにいきました。わたしは、としよかんに本がいっぱいあるのでおもしろそうないめいの本だけでもくじを見たりすこしだけよんでみたりしてかりる本をきめるのです。きょうは、ちからじまんとちえじまんという本とえんそくこわいぞあぶないぞとゆかいな子ぐまポンをかりてきました。まだちからじまんとちえじまんとえんそくこわいぞあぶないぞしかよんでいないけれどちからじまんとちえじまんとえんそくこわいぞあぶないぞという本はとてもおもしろかったです。わたしは、またとしよかんへいきたいとおもいます。

## 2 一年時の読書の記録

| 月 | 日  | 題           | 名 |
|---|----|-------------|---|
| 4 | 6  | こぐまポンの大ぼうけん |   |
| 4 | 6  | にほんわらいばなし   |   |
| 4 | 9  | おしゃべりなたまごやき |   |
| 4 | 11 | 王さまびつくり     |   |

|   |    |                         |
|---|----|-------------------------|
| 4 | 12 | 王さまたんけんたい               |
| 4 | 12 | おしゃべりな玉ごやき              |
| 4 | 16 | まほうをかけられたした             |
| 4 | 17 | はじめてのおてつだい              |
| 4 | 18 | 森おばけ                    |
| 4 | 19 | おおどろぼうホッツエンプロツ          |
| 4 | 21 | ゆみ子とつばめのおはか             |
| 4 | 22 | おおどろぼうホッツエンプロツ ふたたびあらわる |
| 4 | 26 | おおどろぼうホッツエンプロツ 三たびあらわる  |
| 4 | 27 | かいていにまんり                |
| 4 | 29 | めいけんラッシー のはらのだいばくはつ     |
| 5 | 1  | ふたごのまほうつかい              |
| 5 | 2  | ロミオのあおいそら               |
| 5 | 2  | エルマーのだいぼうけん             |
| 5 | 3  | エルマーとりゆう                |
| 5 | 4  | エルマーと16ぴきのりゆう           |
| 5 | 4  | ふたごのまほうつかいとめがみの星        |
| 5 | 4  | チロヌップのきつね               |

|                |             |          |                     |       |               |             |            |         |         |                |            |        |            |               |                   |                  |
|----------------|-------------|----------|---------------------|-------|---------------|-------------|------------|---------|---------|----------------|------------|--------|------------|---------------|-------------------|------------------|
| 6              | 6           | 6        | 6                   | 6     | 6             | 6           | 6          | 5       | 5       | 5              | 5          | 5      | 5          | 5             | 5                 | 5                |
| 13             | 11          | 10       | 6                   | 6     | 4             | 3           | 1          | 28      | 21      | 21             | 15         | 14     | 14         | 14            | 7                 | 5                |
| まじょがっこうのてんこうせい | 101ぴきのわんちゃん | つけもののおもし | 森のポピイちゃんとふしぎなおきやくさま | おにのうで | ぼくはまほうがっこう三年生 | ねこがパンツをはいたら | せんせいけらいになれ | ゆめをもとめて | どうわの花たば | えほんのべんきょうつづけます | そらとおおおどろぼう | かずのえほん | のんたんバスデブツク | こぎつねコンとこだぬきポン | きょうりゅうががっこうにやってきた | ふたごのまほうつかいとめがみの星 |
| 七人のゆかいな大どろぼう   |             |          |                     |       |               |             |            |         |         |                |            |        |            |               |                   |                  |



|             |               |              |         |              |                   |                |               |              |             |               |                |             |             |              |               |             |
|-------------|---------------|--------------|---------|--------------|-------------------|----------------|---------------|--------------|-------------|---------------|----------------|-------------|-------------|--------------|---------------|-------------|
| 8           | 8             | 8            | 7       | 7            | 7                 | 7              | 7             | 7            | 7           | 7             | 7              | 6           | 6           | 6            | 6             | 6           |
| 6           | 1             | 1            | 30      | 28           | 24                | 24             | 13            | 13           | 7           | 2             | 1              | 25          | 25          | 24           | 24            | 14          |
| ふたごのまほうつかい  | わらいじょうごのおひめさま | ゆめをにるなべ（二回目） | 3年生のどうわ | こつくりさんきてください | いたずらまじよ子のヒーローはだあれ | てんさいえりちゃんつきにいく | せんせいのこどもになりたい | 三ちようめのおばけじけん | 大わらいミニミニばなし | マホウつかいのチヨモチヨモ | わかったさんのシヨートケーキ | わかったさんのクレープ | わかったさんのドーナツ | わかったさんのマドレーヌ | かんようくなんてこわくない | とうおうのむかしばなし |
| トムソーヤーのぼうけん |               |              |         |              |                   |                |               |              |             |               |                |             |             |              |               |             |

|          |                  |               |                  |                   |               |               |           |                  |             |                  |                |            |           |                     |             |          |           |
|----------|------------------|---------------|------------------|-------------------|---------------|---------------|-----------|------------------|-------------|------------------|----------------|------------|-----------|---------------------|-------------|----------|-----------|
| 10       | 10               | 9             | 9                | 9                 | 9             | 9             | 9         | 9                | 9           | 9                | 9              | 9          | 8         | 8                   | 8           | 8        | 8         |
| 1        | 1                | 30            | 30               | 30                | 21            | 19            | 18        | 18               | 18          | 17               | 17             | 16         | 24        | 24                  | 16          | 9        | 8         |
| なぞかけよめさま | いたずらまじよ子とおかしのおうち | かぎばあさんのまほうのかぎ | いたずらまじよ子とおまじない女王 | いたずらまじよ子のすてきな王子さま | くろばらさんと七つのまほう | ぐうたら王とちよこまか王女 | まほうをとくむすめ | てんさいえりちゃん金ぎよをたべた | 王さま　なくしたじかん | がつこうにいきたくない日によむ本 | まほうのべんきようはじめます | 一年1くみ1ばん美人 | しずくのくびかざり | じつぽ（まいごのかっぱはくいしんぼう） | にせもののかぎばあさん | いえなきこ　2上 | たたされた二じかん |

|         |           |               |          |                 |                     |          |               |       |              |         |               |               |           |               |             |                   |             |   |
|---------|-----------|---------------|----------|-----------------|---------------------|----------|---------------|-------|--------------|---------|---------------|---------------|-----------|---------------|-------------|-------------------|-------------|---|
| 10      | 10        | 10            | 10       | 10              | 10                  | 10       | 10            | 10    | 10           | 10      | 10            | 10            | 10        | 10            | 12          | 12                | 1           | 1 |
| 3       | 6         | 8             | 8        | 8               | 8                   | 11       | 23            | 24    | 28           | 28      | 28            | 10            | 14        | 23            | 9           | 9                 | 1           | 5 |
| ぬすまれたゆめ | 雨ふりの日によむ本 | 1ねん1くみ1ばんいいやつ | へっぷりじいさま | うみへいったあかんぼたいしょう | にほんのれきし14（せいようにまなぶ） | ゆかいなどろぼう | おかのうえの人ごろしのいえ | うみの王国 | かいじゅうになった女の子 | まぬけなおばけ | 大わらいミニミニばなし 三 | ほらふきうそつきものがたり | みんな犬になりたい | えんそくこわいぞあぶないぞ | ちからじまんとちえじま | ふたごのまほうつかい エスオーエス | ひみつのかたつむりごう |   |

|               |              |               |            |            |        |        |               |              |             |      |
|---------------|--------------|---------------|------------|------------|--------|--------|---------------|--------------|-------------|------|
| 3             | 3            | 3             | 3          | 3          | 3      | 3      | 2             | 2            | 1           | 1    |
| 30            | 30           | 28            | 27         | 25         | 20     | 11     | 25            | 15           | 24          | 7    |
| ちかしつからのふしぎなたび | きりのむこうのふしぎな町 | まじよになりたくない女の子 | ふしぎなかぎばあさん | ロミオとジュリエット | 三びきのくま | 小さいおばけ | かぎばあさんはめいたんてい | 月の上のつよがりロボット | けんかをした日によむ本 | あおむし |